繪本田村物語 一

六冊

喜怒可以勸善
哀樂可以懲惡

繪本田村物語

大坂　三木書樓梓

遠門
巻

田村物語自叙

夫聖經賢傳皆是載道立教之書誠萬世之所取法也如其餘諸子既不免有差況小說野史鄙俚駁雜之書乎然伊川程子曰人各有所長能取其所長皆可用也然則雖諸雜書亦有不可盡廢者予戲論童蒙將以禍福善惡報應影響之理若其小童順賴之則其於教誨豈爲無小補乎由是採續日本記前全太平記元亨釋書王代一覽及謠曲等之數書以雜

出杜撰戯文間亦加畫圖而欲無厭見分書目以爲一十輯而爲一編命曰田村物語庶乎便於閲市求雜書頑童云爾

文化巳巳春日

武關　川上　鰮翁　書

凡例

○此全編ハ正說野說ヲ論ゼズ。モト空言ニシテ。偶實事ヲ交出スト雖其二三ヲ信ズベカラズ。譬ハ桓武帝ノ治世二十四年ニシテ。奈良ノ帝ノ御学ニウツレルハ正說ナリ。桓武ノ治世延曆九四年ノ間ノ。事々物々先後ノ遷アルハ。モトヨリ其實ニ拘ラザル所以ナリ。餘ハ推テ知ベシ。

○親戚官職姓名等ノ如キ。仮ニ名ヅケモウケタルモアリ。或ハ寶貨器用衣服等ニ至ルマデ。今ヲ以テ古ニ宛ルノ類多ク。又ハ支ニソヅンデ事跡モ符合セザルノ如キハ。總テ兒童ノヒタスラ心ニ面白ク。然モ耳底ニ入易ヲ要トシテ。著述セルナレバ。閲者考正シテ嫌疑シ玉フヿナカレ。畫圖モ亦然ナリ。

○此昏ノ文字ハ正字偽字ヲ論ゼズ。和俗ニシタガッテ童蒙ノ見易キヲ禄シ。假名モ亦。五音ノ正キニ拘ラザルハ。由來戯作ノ書ナレバナリ。將此艸稿ヲ石友ニアタヘテ書写セルナレバ。吾著ストコロ。意ニタガフ

コトハアラザレ氏。艸稿ノ國字ニ比セバ少シク違トコロモアランカナレド。只此編ハ專ラ積不善ノ人モ時トシテ盛ニ積善ノ人モ折ニフレテ衰ルヿアレバ。畢竟首尾照應シテ見ル時ハ。天命終ニノガレザル所ヲ知ベシ。

○此昏ヲ編録セル所ノ微意ハ人各七情ノ爲ニ私スルト。セザルトノ二ツニ止テ勸善懲惡ノ意ニモトヅクナレバ。舊博學前輩ノ人ノ年々歳々屢アラハス群書ニモルヽヿナシト雖ダトヘバ勸善懲惡ハナヲ食ノ如シ。須更食ニアケル人アラン。豈因茲食ヲ廢ベケンヤ。由是更ニ贅言ヲモ厭ヿナク。戲文ニモ善惡ノ行ヲアラワシテ。性善ノ心鏡ニ照サシメンヿヲ欲ス。然ドモ古人有言。校書如風葉塵埃隨掃隨有ト宜哉此言也。況吾曹陋識ノ編輯ヲヤ。諸君子ソノ拙ヲ罪スルヿナカレト爾云。

武關川上鰋老人識

おりゝ折つて
やうて悲しゝ
鶏舟うる
芭蕉

弓木甲斐守照門之像惡

後隠形鬼毒丸

起不義之心
動邪婬之念
神明皆知

照門室白波之像惡

呼雲起風
降火而惑
愚夫婦好
殺人而積
悪不休天
道豈無討
岩岸刑部太郎廣成之像悪
後韋駄天刑部
隱れ
家や
よめ
菜の
中よ
殘る菓
山風雪
白鶴翁之像善

月雪姫之像善

関正市正秀之像善

田村物語總目録

壹之卷
○第一回　御狩の武備　○第二回　秋夜の列星
貳之卷
○第三回　觀音の告　○第四回　異石の能
叁之卷
○第五回　名家の災　○第六回　忍夜の珍事
四之卷
○第七回　惡報の緒　○第八回　白鷹の便
五之卷
○上卷第九回　武門の花　○下卷第十回　忠孝の餘慶

通計十回目次畢

復讐奇說田村物語卷之一

武關　川上鰮老人編輯
下流　梅梢軒關旭訂正

第一回　御狩の武備

傳聞。人皇四十九代の帝光仁天皇と申奉れり。天智天皇の孫。施基の皇子の御子なり。御在位十二年。御壽七十三歟。崩たまふ。光仁帝は太子。山部親王天應元年四月寶祚を受嗣ぎ。御即位の大禮行はれ。桓武天王とこれなり。御第早良親王と太子と定まる。御母は高野夫人とぞ申されし。高野の乙継が女也。天皇人と形り寛仁にはましまして。能民の父母とぞ。御仏滅かなりて。月卿雲客おのゝ其職を守れり。人臣の道正しく日出度かりける

御時なり。然るに故ありて山城國愛宕郡。宇多の邑に平安城を興基ありて。同國乙訓郡長岡の都より。延暦十三年十月廿一日遷都あるけり。後高倉の院。治承四年六月三日。平清盛幼主を奉じて都を福原に遷しけるが。同十一月又舊都に復しけるとぞ。平安城は今の京なり。天皇常に武備の助ともなれぐしくて遊獵を好みあひられぐ。遷都のみぎり所くれ地勢。風景なども清旌覽のあり。同十二月小倉山に早良太子と俱に御幸ありて。鹿狩ありけるに。頃は小倉の野山深み猪鹿のとぐしく行く。御狩の体美しく。各おりひくに出立數百の駿馬の嘶を山彦に響て。鷹と居犬を牽て郊外に滿くたり。比も暮冬の空寒く立はぐく森の此方に織金の御旗を日に映じて彩雲を色。素錦の御幕を風に帶て白浪をたゝむ。其外色〻の御旌旗風に靡く。諸將乃隊伍

數しらず。紅紫にいろ〳〵を飾りたるは。時もあれ春ふかみ花の如し。此日右大臣藤原の是公。中納言藤原種継。從三位右衛門督坂上の苅田麿。其御子田村麿。その外弓木甲斐守照門。弓削の大進國房大伴負純。同高貫等も供奉せられよ。時刻至りて御狩始の御合圖の太鼓を打ならせば。數万の勢こゝ一時に声を合せたる猛こそあれ。百千の獣も足ゆへ過じとおぼえて。おびゝしくほどもなく。林のあるさ峽よりて。猪鹿鬼の類を數多狩出せば。南北に走り東西に矢廻れを。我おとらじと弓を引て射伏せ馬を突留或は岩根に追ひめぐれ鹿鬼の類を組留て生どりもありて。いと興ありけれ。天皇も兎二ツ鹿一ツ的射止ありて。叡慮ことに洞いく。俱に興に入せ給ふに。早良太子を朝夕より花麗ふいく立

荷田雪

早良太子
弓木照門

玉ふまで
ゆく。御獲物も多くうれ
ぞ動とそふ求たまへども或
を射損じ。又を後辺のかゝみ
獣生ず。矢先のたより悪しして
打ものなど。遺恨をおりひたまへ

どもせんをぐなく和久ゐふ祈しもなれ。金毛粉面
の老狐二ッの子狐とともに。西の方好れ麓より指
生ゝれく天皇の御馬前を左ゐ過りて走り行を。勢子ゐへ
道ゐと取擁ふ天皇の御後ふ招ゝれ弓木照門ハ已ぶ
ゐ柄ふせんと原来不祥生なれば。m馬前ゐ立ゆ[illegible]白重藤の
弓を満月ふ引ちがりゝれ時。老狐を我子狐を厳ふて左ようゝえ
右ふ驚ゐ手くに走廻り擁ゐ遁ゝとすれども。前ゐ逆木を設け後を
勢子ゐ追ほめられて。遁所ゝに道ゐ二ッの子狐を四足の中にかゝひて。
照門の方ゐ向ひまを合るゞ如くゆしてうぶく生れを得ゝうと照門ゐ
兵ど切ゝく放つ矢ゐやまこび。老狐の左れ眼より肩先うけて。矢尾白く
畳ゝけば四足を空よゆ輾転反倒とく苦しゝろたゞほと踊ようゝ暇ゐ

ちぐ丹照門が方へ向て顔色眼より血を流して形面忽紅丹漆ゝし白き歯をむき出し襟の毛逆立て怒りたれば流石邪悪豪氣の照門もうろたえ毛の毛も逆立ばうろたえ子狐をとらえ驚て八方へ逃走れを。老狐を一箭を帯ながらも猶子狐の行方へ二矢迷ふて。次第ふるて行を早良太子を父君ゆへ御とゞめ不仁ふかせまれが。今朝より汗獲物なしを竊ゝ憤ゝ思ひ折なれ。南馬弦進ゆく手負ゝ老狐を逃さじと。只一箭ふ射ゆせるひとるゆゑ。照門とゝ又ゝ子狐を追ゝ進みまれふ。一の子狐ハ後ふ逆来と越て走り。残れ一疋の子狐あまりに強く追とゝ。東の郊原ふ屯しむえる。坂上の苅田麻呂の四子田村麿父君の傍ふ弓箭をもつて走のしまれ後への方へ逃隠れ。抑此田村麿とゝ云ハ年

漸十四眉目清らして志も廉直謹素の御生質ハれば父苅田麿の慈こ大ゝなれば。此日天皇ふ御願ありて田村麿をも伴ひ給ふ。後ふ大納言に昇進。右大将を兼ねひて禁中をも護し奉ゝ此公形り。かくて田村麿を小狐の忍ひ入のゝ。たゝ顧の公。昼の元箭を以ゝ子狐の四足の間ふさし入からこの外ふおしゆりゝ人だ。子狐を怜も拯奥れ斗水を得。困鳥の森ふかくれ入ゝ。又ゝ人ゝ東方さして逃去まり。天皇是を御覧ありて馬を進められ何故ふ小狐をば放ちゆりけれとハ不審ありれば。田村麿急ぎ進ゝ出地上ふ跪れ。涙を浮めてゆされ。今日しも御狩乃此本なれば兎ゝ角ゝ申ふ紅ども。いうまゝ親狐と子の為ふ云ふ孝に走れふ速なれば。つゆ千年の命ハ矢の下に落せれ有ゝ。

先程より遠目ゐ打守て詠め居られよ。甚愛情の至まれこと志のび
かゝれふ。人の親の子代おりゐハ捲さゝにとと存ゝ。子狐こそ甚
侍ふ故ち母りゐへども御狩の場ゐて殺生を厭ふゐを非ぞ。所不審
代蒙りいくは。回答なれぞ。おとの多もほしと。母上入く言上す
及ばれられ。仁心至孝面ゐ顯まてえへられを。流石を苅田麿の御
子ゐりけるとと諸人模まを打ゝく驚嘆せねをゐりけり。天皇も清
浪の露うかゝて。実も汝を器軍の総としてやさしくるゐ
かゐと。ゐことゝら御感嘆浅うふび。常に愛しまふ所の白雪と名号
白鷹を。當座の御褒美として田村麿へ与ゑ自ゐろ。父苅田麿を
御覽じていゐゐ汝教年の忠勤神ゐも叶ひられ。仁孝の
子代設ふゐを。坂上の名家弥栄なるを。花嶺ら田村麿

ゐ生を教諭せよと宜ひて。御馬をかゝ五人ぞ。坂上御父子を地
上ゐ伏ていゝくなれぞ。御こゝの多もなく。有がこ流ふれふ
を理ようそゝふをれ。去程ゐ夕陽西ゐ臼ゝて冬の日けいと短
く蜻ゐ通ふ鳥を暮行遠寺の鐘ゐ送られ。州木自返景の風に
動む。人の心も朝を進ミ夕部ゐ退く。天然一氣の通へるゐぞ。蓋示
の是公頃を計ゝく御駕を促し。還幸ほしなば。早良太子を
乙の矢ゐ老狐を射ゐふまでゐ。いと不興氣ゐ渡ゝをられ。照門
も老狐を射て又子狐を追行既ゐ射留んとせを。田村麿放
ゐのみ形ふび却く天皇の御感ゐめづかを。乞ゝ汝御狩場ゐて
汝を自の恩賜わりく。諸人の美望ゐいぶりしとをいと元腹いゝを
ことゐりと。己が邪欲ゐ引されて。是より竊ゐ雛を捨びるゝを。

爰に又中納言藤原の種継卿、二人の御子あり。清見を満る代
とて十六歳に成る。御妹月雪姫とて十四歳にして天の生る
麗しき御質、風流閑雅を假の化粧を待ず。花ばゝ海棠の花従び
て春雨に浴し、垂柳の緑嫩しく東風に靡く異なるべし。一度微笑
を百の媚を生じ、六宮の粉黛顔色なしが如く。西施ぶ顔衣通が姿
とゝくも恥ぬべうぞ。其清麻呂なさはやさしく歌の道
いさゝか形り。琴書又を機織さへ学び得あきらかなれば父
種継卿日夜袖の中なる珊瑚の玉掌の上なる芙蓉の花愛
慈み限りなかりけゝ。満千代君を三歳の時母上に別れ
月雪姫に今の側室白菊とゝ云ふ女の産れ所なり。白菊を麗き
婦世に双かゝ形り。されども心直にして二心なく君に仕へる

に去年の冬御狩の折ゝ。種継卿も供奉せられ。田村森麿の
仁孝に引て殊に清らなる生るを見る。父の苅田麿も老實に
ちゝく弓箭の道に達せる幸を。世人の知れ所なれば。月雪
姫を田村麿に嫁せ。長く一家のよしを結ばんと。弓制国房に招
かれて深くも憑まれば。国房さる心を得て苅田麿に委細
代語る。苅田麿も歓びたまひ早速に兼引ありて万事整
ひ。吉辰を撰んで納采とぞ送られ。去程に田村麿の年
漸十五歳なれば。月雪姫の八輿となり。両家縁を結べ
ば後は仲睦まじ。曾て常に音信絶通ぜられ。いと懇意
なりけれ。かくて光陰流水のごとく。星霜早くも去り。延暦
十六年月雪姫は二八の春を迎へ。二月もゝ弥生の空も半

なりしに。主並ぶ御園の花本を爭ひ寄けて。天も花に酔ひぬべ
と。その景色たとえんかなく。樂波寄れ池の面を派も遠く。山吹
のかげに浸して金の水は源に流ぶ。枝に馴深鶯の声を。和ぐ
風のこゝろをさとし。花ちらふ小蝶の舞に更行春の姿とおもふ。
此折から月雲姫を多くれ屑。左右人ども御園ふいで
まひて。そよ〳〵と。花を弄びまつる。ふと古人の哥をとゝ出まひ。
短冊に持来れとのりければ。左右人ども急ぎ料紙を揃へて奉る。
打笑まひ玉まとのゝ。

山ばくふ霞のまよりほのうもも
と。いともうれしそうに書給ふ。こ春風のさそひまて短冊
を吹帶ひ裏と表と翻つゝ。ちいさう と西の方なる庭の

塀のあなたに落散とゝえたしがかとみは此日田村麿満ふ代ろ
両公會合まひ。いつもれぶと。近侍の人〻とともに射御の術に
学びて居まひしが。件のふぶ〳〵田村麿の御まふ馬の鬣の辺りに
止りゐれを。何心なく取あげえまふ。山猟かとのまよりほのうふも。
と墨に清〳〵歌の半に記したるみで。打笑まひ奥ふ乗馬上
なが〳〵ふ勝なれ矢立の筆に抜とりて。

えゝし人とゝまひ〳〵もりまれ。

と下の句を書給ひまひる村。近侍一人いそがはしく走りまて。その
短冊をとなりより吹ちりゆく。返〳〵みろりにへとて双手をとし
出せど。田村麿曰いやさよ我戯ふ下の句に記ふ既ふ反古とこそ
れで。霜ふ隨ひぶとと打笑まひ。興ふ乗じて奉る。

日本物語卷之一
月雪姫
月雪姫短冊を
ひろひて不図
田村麿と直面見
ゆくゑを慕ふ
十四

日本物語卷之一
滿千代
田村麿
十五

取まり。足とを姫君の御筆ゆて。君が下の句と記したまふ。さ
幸ひなれど。姫君の涙こそ打ちうられて。早くに御入輿も
あれかしと希ひいなど戯れ奉て。打笑ひ足でやみ奥の方へ
とて持行きぬ。田村麿大ひに迷惑しつゝも詮方なく。夫より
馬に下りて立ち入て。是彼に仰せ〳〵只今の短冊をとり捨られよと。
宣ふに近侍の輩皆うち笑ひて揃へて。後ろを君の簾中となり
ぬる姫君の方へ。御筆の糸りゆとて何ゝ苦しかれべとて。更に返
奉らざれど。糸力なく田村麿も紙あれ打笑ひまひて止みぬ。
此方ぬへ短冊の堀れあるとに吹散るを慕ふて。姫君を紙とも
暗に。外の方に垣間見てあれば。滿千代を初め奉て近侍の人〳〵
うち群田村麿を馬上よりつく。件の短冊ゆ何ゆん書きゆと

姫君を稀ゆ對面を志ゆ人〳〵も。おもてゆられで此折〳〵ばかりこそ
ゆ。面を美玉のごとく目秀眉清らゆに威あつて猛らざる風姿
に月雪姫ゆ比ぶるゆ忽脱胸として短冊の事も打忘れたる人余
念なく見とれ居ゆ。中に伶俐左右人春雨といふ者が心ゆ
ゆめて早くも件の短冊を取久しくあれば墨色さえ妙ゆ下
の句をとりしありけるとば。其〳〵姫君の御前ゆ出ゆて只いまもえ
なきゆ如く。かゝれ秀峙君ゆ紅糸を結びゆふを姫君の僥倖餘り
あれのこゝろ。不圖も下の句を書ゆ人ゆ。子とせ
をかゝて御夫婦の涙睦じゆ例なるゆ。短冊を奉てけるとべゆ人
を空ゆ月雪の花れ紅添紅の顔うち覆ひゆ。中〳〵ゆ
足ゆ日夜おりゆの媒とぞなりにゆり。かゝて秋の半過ゆ比。

月雪姫に公地例なくして病の床ふ卧柴の露おのげうるにあり
さはふ上下氷心ざれそなかりきアて

第二回　秋夜の列星

且説中納言藤原の種継卿そ。雪姫の病悩ふ平愈しるふふ
はじをを悲しみ。塩梅臣共うつと嘗しめけれが。わうて白菓を
薄と氷を踏公地して。終ふたてれ国手の数〻診しもれふ醫論
紛〻として定〻がく〻てハ盡せねるなりと。常に腹藥きるふ所
の囲ふ。濱田長立院とくれるの。良劑を。ふくせるれども。日と重ふ
其證なりけるで。ふハ如何ふせんと坂上家へも巨細ニ告ちくせるに。
両家の使者。馬駕籠の往来日夜ふ〻えそ。閨門向を殊ちらふ。
爰ふ三人彼所ニ五人打寄竊ふ眉ふ顰ふれぐるりなり。是より

髮ふ勢刎筆捨山岩振のかと邊りふ。白鶴翁といる異人あり。
世塵のかゝはしをさけく。山荘の燕居寂ちく。晨ふ浮雲
の行衛をおりひ夕部ふ松風の音に嘯く。盈といへども南窓の
りとに打眠て。夜更ぬれども書籍のうへふ眼を洗ふ。仙骨童
顔はして。乾坤を掌中に握り。鬼神不思議の術をもく。飄
然としく世ふ出れの表めれども。世の中の為ふ難波のはあ
ふ論ぜで心ふ煉さぐ光陰を送りにれが。須しも秋のすへふ
至りて。或夜空みぐりにらち晴。宇宙風ふして。列星文をは
いく静けさ侍ふ。白鶴翁そ杖を石上ニ曳く高らかに登て。
京師のかをを望で。帝星殿大らふして古るも光耀燦爛ふ。
其傍ふ将星めりて帝座を守護し。又将星ふけぐるれ星

あり。敢て小なれども。其光清き事帝星に劣らず。常に將星に放れ来る。頃の敢となせり。然れども北方より一の妖星飛来りて。彼小なる星のうへに墜ちとゝまりが忽ち小星を度を下れる事数十度にして暫止り。將星も光を止まり。是ぞあやしとこゝろ新に。件の妖星を捲却て將星の座を遶て帝星の方に共折しも。先に天度を落下りし小星又金光をとゝろいて九天に飛上り。妖星は越ると云へども。妖星は忽ち碎て数千の青光となり。麈風に吹散ていづくともなく消失ぬ。小星も元の座に立かへりて光彩増に清らか。鶴翁もつゑを捨て嘆息し。嗚呼天なれども命なる哉。徐家の國君に災あり。道れざるに災の後却て

かゝるべ。賢人名を天下に擧ぐと。獨言して菴に帰りぬ。ゝと世祇を辭して師父恙なくはゝ。何のかのとかくまでハ嘆息しつゝ。尋ぬる者あり。鶴翁驚て後に顧ると。我一人の門人あり。常に此人なるべを山荘と名付る人もなかりし。此人を是いろなれ人ぞと尋ぬる。同國鈴鹿川の湄に細き煙も立ぬれたる郷士に。関正右衛門正久といふ者の子にして正市正秀といふ者なり。年齢十六にして究めて其生質正しく。父母に孝順なれる。近村に誰ちゝぬ者もなし。正右衛門が先祖いかと是諸侯の孫なれが。故ありて民間に下りけれども。其公はいやしうして。正右衛門が妻を柴と云。娘を乙女と呼て。親子四人清貧に暮しけれが。定まれる

白鶴公翁
白鶴公翁
妖星と見て
奥へとんずと帰る

関正市

家業なれど。或時を鈴鹿川ゝに網を投じ。又を獸を射さく
市ゝ鬻るどしてつぶうゝ四口成已けれ。かゝれ清貧、正市ゝ成れば
鶴翁も不便ゝもうし。彼而已を山莊ゝ籠れるを免けれゝ。
正市盈を鹿を射兎を狩ゝ家業のつとめゝ日成已し夜ハ父
母ゝ告ゝ折ゝ鶴翁の菴ゝ至り。そゝに天文又を軍旅のつ
けゝど頻ゝ求ゝひゝれゝあぞ。はじゝ鶴翁の門人とぞなれりる
が。此夜を。久ゝの空みどりにいと打晴めれど。天文の道をも学
ぶゝと。鶴翁が山莊ゝ至りゝれゝ。庵ゝあゝざれば。其所ゝ此所
よゝと尋ねらち。後も近ゝ東なる山の石上ゝ鶴翁獨天文成
らゝ派居るゝまなれど。爰ゝ至りて言葉を發せんとせーとれ。
鶴翁を只天を仰ぐ嘆息ーて。先の獨言を成れゝ。正市不害

なれぞ。ちゝぐの車ゝ乗ゝ間れゝて。ゝれ。その附鶴翁ゝ
泄いゝの間ゝ爰ゝ来りて我獨言せれを居れゝ。ゆゝと尋ね
ば。正市ゝ成ゝ。今骨を浮虚れ滅りて秋のけもの名残成
ゝ。師父とともに此風景をも派め。いゝもの如く教誘も蒙り
なんと。扨とを山莊ゝまかりけれゝ。主を居ゝまで火桶ゝ入漁ゝ
消残れのみゝて師父そいゝね。足へまゝざればそを爰とたびゝ
ゝ。ゝ言葉をかゝんとせーた。先の事ゝ
宜ゝて嘆息ーのゝ故。扣居れなゝ。特師父の先ゝ獨日所。その
意を解ゝ。願くゝ教ゝとゝれ。某が愚なれ胸中の雲霧を晴
めゝれと冀ゝぞ。翁いゝらゝ茫ゝれ天機豫ゝらゝぞ。
我洲ゝ隠言葉を以ゝ教ゝ。能勉ゝ自その意を知べーとゝ。

共に山荘にかへり。雲箋をのべて書を甚文に曰。

刈田再不生

田鳥村繁榮

此十字是。天數なり。洩も自然。此内中にあづかれる事なるべしと教まれて。西市いと不審なれども。願くはその詳なる事を示しの人といふ。鶴翁田答て曰。時いろいろ分明なるべしと。強に問ふなれとて。夫より世の中の事。くさぐさの物語に秋の夜のあかつきまで。四つ二更と成頃ともなりぬれば。西市も父母の案事をうたも計りがたしと。鶴翁に暇を乞て又も近きに尋きたまはせんと。我家に帰さして帰りけれが。道すがら思へらく。先に師の教まふ十字の内に吾も自然。その句中に頂とあれば。何ゆもせよ天數

を我身にも豫め定れる事なれば。さきれば徒に年月を過さんと思ひ。更に朽惜き事なれば。我も筋ある家に生れ来て。かれ賤しきさまにあれど。大丈夫一度明君に仕へ名を後世に揚て父母を顕さばと。是に過られず。やはれぬと。勉励の志を立ぬ。孝心深く父母に事れの困みに鶴翁の山荘に通ひ。身に柔安く。道に学びなれとも有難きれ。然れに或夜いつものごとく鶴翁の山荘より吾屋へ帰りなれば。山路に松柏の枝を交へて。いとりの凄く。門戸を守護犬の声も。遥に聞へて。自人里の遠きを知る。鄙間に飛ぶ蝙蝠の形も。近くに見へて。左なきに月影の傾くを。おしむ。看りの景物。心くれ腸をとどめしめんとあはれく。いと感も起てゆれ折ふら。近に女の声あていと苦しげに助け

乙女なきけまくと泣叫ぶを。西市耳ゝ聞入て。どこ〳〵ん〳〵知れる声なれば。何ゆゑ行えんと。少し道を廻りなれど。声に知る縁ゆ彼方ゆ尋ぬ行ぐ。いよ〳〵近きれゆ隨ひ我妹乙女が声と笑われば。益こゝ驚られて。飛ぶ〳〵に走り寄てあるば。おこ情なや乙女を赤裸になりて。素雪のごとくなる足に藤葛とりて痛し〳〵も高き小ふに引上る。山のとがさのれ松の樹の枝ゆ引上肩より胸のうを血〳〵ゆ流く。紅梅の手ゆ悩めれ風情あて。なれ緒も絶れどうに叫び居〳〵て。西市涙雨のごとく。如何をせんと驚きければ。かれ時前ゆ弱〳〵叫びと。聲ゆ立〳〵いうゆ乙女よ兄西市とて爰ゆ来れ。ぞ。痕も洗〳〵と足ゆ流なれど。公を怪こゝ〳〵ぎし。只今救ひ取せん

と。松の枝ゆ欠のぐと。搦〳〵編と解んとせば。此作ゆ解〳〵ども。れうそに便を得ざれど。やせんかくやと憂愁煩ゆ。風与一の手段に儲け。我帯をうる〳〵と引解て。件の蔓かづに為〳〵繋ぎ合せ。松の大枝に便ゆ為〳〵と鉤ゆ結〳〵けれゆ。乙女を今年十四歳なれば。痕を負〳〵れうゆ樹上ゆ攀上る。苦痛ゆ忍びかゆて。声さへ出ぬ程よ。弱〳〵てやう〳〵と地上ゆ下り立しが。忽呼と一声さけびて。甚き息を絶ゆ。西市を十方にられ。懐抱てさま〳〵ゆ介抱ゆし。ことゆと痕をとれば刀創の痕ども見へぞ有合木竹を以打破て。れゆ振ゆて。所〳〵皮肉ゆ切け。湧出る血を泉のごとくなれど。詮なべなく声に限と名に呼ぶ。更ゆ答のあるばとも去

ども鳩尾のあたりを微く動さるれば。扨そいまこと死せざるのと。あたり近き野中の水を掬して我により侍へて。乙女が咽を吹込。脊なでまさすり撫さこたり。公と盡していたりさるれば。忽然と一息はらして眼をあけたれば。力と得て。公とそふ分抱るしければ。其時乙女を若しげよ正市の顔をうらそへていふ兄上かれ災難よ逢れそ今更よ是非もなし。そも口惜き次第を語り伝せ給へ。兄上今霄を山荘よりの帰るを待て聞りて遂まれば。父上あも案事あり。迎ふ行んと公場けれど父上自むひふ出あり。御身至孝の洞公ようへいり斗う本意なりもおそらんと　そひより玉ひ。母上あ少しく夜を籠て急ぎまふ業のあれば。いふ せんと竊ふ憂まふと。

うへ余所ふ見なまを公ふ知せはしへ。父母あへ知せはしへ。門の辺まて出て待へ。浮身なりあへ少しもあへ此あをも告進へ度一ッあへ妾も案事まいへせいあで門のわとりふ出つ入つして待暮せ。におそろしげあれ鬼ども人ども入ワけ難き大男の。妾が後よりあり。氷なそ刀と抜く声と立ち一刀ふ泉下の鬼となへ。言さ生へ公小服を抱へて。死へごとくに山路をさして走り行ば。只惘ふあれて怖しさ云ばかりも形く。雲路をたどれ公地して。此所まで来へ此松のかとにいへふ死ふして彼男のしへらく。汝今我を盗を捕へ。縄の中の臭嚢の裏れ蟲なり。殺そも生そも我此刀の手の内ふ任めれで。死んとやへ我言葉を従ふ事なれ。

関正市妹
おとめごぜんひ
乙女姫
関正市

いとしいきくれ者命惜うふねさなれで。生んるのが願うゞ我
いの所ゑ行なば。只今の破くれ衣を脱捨く。朝夕ゑ錦繡
を纏ひ。口ゑ美食を喰く。昼夜擽樂の席ゑ至いきめん。将
父母兄弟あらば。我より能ふ傳て。常に汝が住れ家ゑ往返
をさしめ。少しも疎遠なれ事あらじ。今汝をかゝとの家ゑ賣
らの上ば。我も少きく金銀を得。あんらも今のさまゑ居うへて。
大のふ仕合かれどきに。涙ぐねばひく我とともゑいくれどし。
おどしつきしつ。妾を將て行んとせ。絡りのかゑしさ。艶を力
の限りゑ双ゑばあげてうち拂ひしゑ。如何ゑ〻さん彼ら鳧
先ゑ當て。飯殿きく出く。胸ゑ滴てた上ば。彼賊忽地大ゑ怒り。
出ゑも劣ゑれ小女うゑ。いでゑ危ゑいでおりひきくせんと。ひくく

赤裸ゑ成し。ありなゑ藤かばくく以く。いくく搦め松樹の上ゑ
引あげて已も松の枝ゑ登く。枝折ありてきくかゑ。うちくく
笑ひ。ひくくひてそ打闘殺しになんとせしところゑ。七八疋の犬
まくく頻りに吼かくて跡より猟師などの来るとれさまなれば。
賊そ前後を顧。足ごやに樹を下てくぐくと何ゑんいひ
好ばゑ。ひくくゑが衣類を取く何所ともなく逃去れくちをし。
若くさ悲くちゑ聲の限りゑ叫べど。件の犬さいづこへ迯た
て見へぎりくれが。測らずも兄上のまに救れ。逢くてまく
幸のうゑしさよ。されども先ゑ胸のあくりを強くくられれ。
命たそうれぎくもあくば。よくく父母ゑは久あまへ。汚身
もすくゆに涙くくせたまへ。此世あくゆくはくくてまくも。こ

限り那らんと息の間なく。語れさん若しこげふ。次第あるべきと
よつて。命数爰に盡わりれう。無職や夜半に露と消給ふ

田村物語巻之一畢